

浅川扇状地遺跡群

本郷前遺跡（2）

三輪3丁目フォレストウイングマンション新築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年3月

長野市教育委員会

浅川扇状地遺跡群

本郷前遺跡（2）

三輪3丁目フォレストウイングマンション新築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできない貴重な財産です。中でも埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」といわれ、遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、当時の人々の暮らしぶりを現在の私たちに伝えてくれる重要な役割を持っています。

ここに長野市の埋蔵文化財第150集として刊行いたします本書には、マンションの新築工事に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査によって得られた成果を、浅川扇状地遺跡群に属する「本郷前遺跡」として詳しくまとめてあります。発掘調査では、溝跡や土坑・小穴が見つかり、溝跡からは弥生時代中期の土器が出土しております。この成果が地域の歴史解明、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力をいただいた事業者や地域の皆様、重機による掘削作業や現場事務所等の現物提供をいただいた関係者、また、発掘作業に携わっていただいた皆様に感謝申し上げます。

平成30年3月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例 言

- 1 本書は、長野県長野市三輪地区における「三輪3丁目フォレストウイングマンション新築工事」に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、事業主体者である個人からの委託により、長野市長 加藤久雄 が受託し、長野市教育委員会（担当：埋蔵文化財センター）が直営事業として実施した。
- 3 発掘調査地は、長野県長野市三輪三丁目826番1に位置し、開発事業面積のうち埋蔵文化財の保護対象面積は613.47㎡、発掘調査面積は150㎡である。
- 4 発掘調査は平成28年11月11日から同年11月24日にかけて実施した。
- 5 現場における発掘調査は鈴木時夫が担当した。本書の編集は飯島哲也の指導の下、鈴木が担当し、埋蔵文化財センター各職員がこれを補佐した。なお、執筆は第I章第1節を飯島、それ以外を鈴木が担当した。
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土遺物の注記記号は、アルファベットで「AHG」と表記してある。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 本調査において確認した一部の遺構・遺物については、その資料化の義務を果たせなかったため、本書に掲載していない。しかしできうるかぎり追認できるよう、基礎データはそのまま保管してある。
- 2 実測図等に掲載した方位は座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経138°30′00″、北緯36°00′00″）の座標値（日本測地系2011）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光派測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。
- 4 遺構図は、全体図（遺構分布図）を1/100、遺構実測図を1/80縮尺で掲載している。
- 5 遺構の略記号は以下の通りである。 溝跡：SD 土坑：SK 小穴：SP
- 6 遺物に関しては、調査員により原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図1/4、土器拓影1/3に統一してある。
- 7 遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 遺物実測図において、スクリーントーンは赤色塗彩の範囲を示す。

目次

序
例言
凡例
目次

第I章 調査の経緯

- 第1節 調査の契機と事務的経過…………… 1
- 第2節 調査経過（調査日誌抄）…………… 2
- 第3節 調査体制…………… 2

第II章 遺跡周辺の環境

- 第1節 地理的環境…………… 3
- 第2節 考古学的環境…………… 3

第III章 調査成果

- 第1節 調査の概要…………… 4
- 第2節 遺構と遺物…………… 8

第IV章 まとめ……………12

報告書抄録

奥付

挿図・表目次

- 第1図 調査地位置図（1/50,000）…………… 1
- 第2図 調査地と周辺遺跡（1/20,000）…………… 3
- 第3図 保護対象範囲及び調査区（1/1,000）… 4
- 第4図 調査区全体図（1/100）…………… 5
- 第5図 調査区断面図（1/80）…………… 6
- 第6図 SD1 遺構実測図（1/80）…………… 8

- 第7図 SD1 出土土器実測図（S=1/4）…………… 9
- 第8図 SD1 出土土器拓影（S=1/3）…………… 9

- 表1 遺構一覧表……………11
- 表2 遺物観察表……………11



発掘作業員集合写真

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査の契機と事務的経過

調査地は、閑静な住宅密集地の中で駐車場として使用されていた場所であり、そこに開発事業面積約613.47㎡のマンション建設計画が浮上したのは平成28年2月12日に遡る。開発事業の主体者である個人（以下、事業者）からの依頼を受けた建設会社の担当者から、長野市教育委員会（以下、市教委）文化財課埋蔵文化財センターへ埋蔵文化財の取り扱いに関するファックス照会がなされた。事業者からは同年6月2日付で文化財保護法（以下、法）第93条第1項による届出が市教委宛に提出され、同月10日付28埋第2-58号で市教育長から法第93条第2項による指示（発掘調査）を通知している。その後、7月19日付で事業者から「試掘調査依頼書」及び「土地所有者の承諾書」を受領し、9月13日に試掘調査を実施して当時の地表下約55～65cmにおいて良好な遺物包含層を確認し、10月31日付28埋第5-12号にてその旨報告した。その後、埋蔵文化財保護協議を進める過程で、現場作業を平成28年度に、整理作業を平成29年度とする内容を含む「埋蔵文化財の保護に関する協定書」を10月27日に締結した。平成28年度は、マンションの建物部分約170㎡の発掘調査実施分であり、10月30日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、現地における発掘作業は11月11日から24日までの14日間実施した。平成29年3月17日付で委託料の減額に関する変更委託契約を締結し、契約条項第8条に基づき、同年3月27日付で事業者宛に実績報告書を提出して、平成28年度分の業務を終了した。協定書に基づき、平成29年度分の整理作業については、平成29年6月1日付で委託契約を締結し、発掘調査報告書として本書を刊行した後、平成30年3月23日に全ての業務を完了した。



第 1 図 調査地位置図 (1/50,000)

第2節 調査経過（調査日誌抄）

11月11日（金）重機による表土掘削開始。 11月18日（金）SD1土器出土図作成。完掘。
11月14日（月）重機表土掘削。 11月21日（月）全体清掃。全景・個別写真撮影。
11月15日（火）作業員雇用開始。遺構検出。 11月22日（火）空撮。測量。作業員雇用終了。
11月16日（水）遺構掘り下げ。壁断面図作成。 11月24日（木）測量図結線。現場作業終了。
11月17日（木）遺構掘り下げ。壁断面図作成。

第3節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として、文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。なお、発掘作業に伴い必要となった掘削用重機や、コンテナハウス等の機材に関しては、開発事業者より現物提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	近藤 守
統括管理者	文化財課	課 長	青木 和明
調査責任者	埋蔵文化財センター	主幹兼所長	森山 正美（平成28年度）
		主幹兼所長	石田 正路（平成29年度）
		課長補佐	飯島 哲也（調査担当者）
	庶務担当	係 長	竹下 今朝光（平成28年度）
		係 長	小林 晴和（平成29年度）
		職 員	宮崎 千鶴子
	調査担当	係 長	風間 栄一
		主 事	小林 和子
		研 究 員	田中 暁穂 遠藤 恵実子 日下 恵一 篠井 ちひろ
			清水 竜太 鈴木 時夫（主任調査員） 高津 希望
発掘作業員	植木 義則 内田 正征 江守 久仁子 岡沢 貴子 岡宮 純子 後藤 大地		
	杉本 千代 月岡 純一 中村 泰明 峯山 真由美 山本 光洋 渡辺 由美		
調 査 員	青木 善子 鳥羽 徳子 武藤 信子 向山 純子		
調査補助員	窪田 順 市川 ちず子		
整理作業員	清水 さゆり 関崎 文子 西尾 千枝 待井 かおる 三好 明子		
測量業務委託	遺 構 測 量	株式会社 写真測図研究所	
現場協力		株式会社 フォレストコーポレーション	

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

調査地は本郷駅から南に約350mの地点にあり、浅川扇状地上の標高370m付近で南向きになだらかに傾斜した位置にある。旧地形図（大正14年測量・昭和27年修正図）によれば調査地の北側にある鐘鑄川より北は桑畑や集落が広がっているが、調査地を含めた南側は水田耕作地であった。この周辺は「三輪たんぼ」と呼ばれた条里制の名残があったが、高度経済成長期からの開発により姿を消して今は閑静な住宅街である。

第2節 考古学的環境

本調査地のある三輪地区ではこれまでの発掘調査により、広範囲にわたって遺跡が分布している状況がわかっている。ここでは弥生時代中期の遺構が検出された周辺の遺跡の概要を記載する。

2 旭幼稚園遺跡

昭和42年に幼稚園建設現場で発見され調査が行われた。調査開始時点では遺跡のほとんどが破壊を受けた状態で、南西隅の一部を調査したに過ぎない。住居跡と思われる落ち込みが確認され、一部床面らしき平坦面を検出している。この落ち込みからは弥生時代中期末の土器破片が大量に出土している。今回調査した調査地のすぐ北西に位置している。

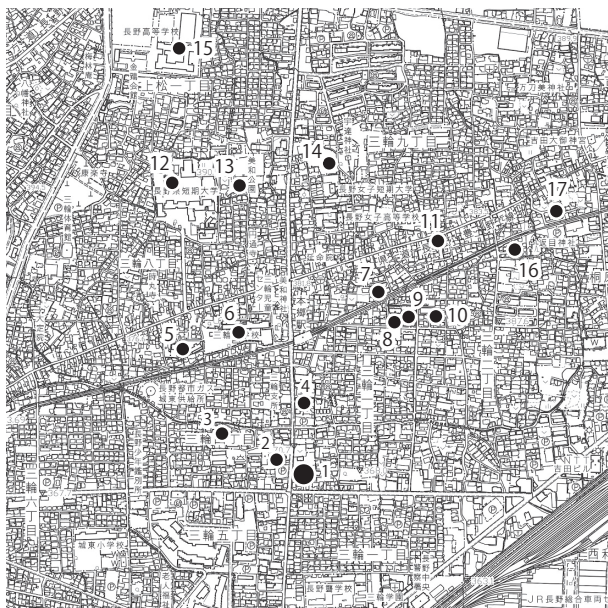
3 本郷前遺跡（1）－大成産業（株）三輪共同住宅建設地点－

平成15年に共同住宅建設に伴い、約200㎡の発掘調査を行い、弥生時代中期の住居跡1軒、竪穴状遺構1基を確認した。

5 三輪遺跡（6）－三輪保育園建設地点－

平成7年度に園舎改築工事に伴い、約460㎡の発掘調査を行い、弥生時代中期の土坑1基を確認した。ほかに弥生時代後期住居跡1軒、古墳時代前期住居跡1軒、同後期住居跡1軒、奈良時代住居跡2軒などが検出されている。

ほかに15 本村東沖遺跡（1）では弥生時代中期の住居跡3軒を確認している。



- | | |
|------------|---------------|
| 1 調査地 | 10 三輪遺跡（3） |
| 2 旭幼稚園遺跡 | 11 三輪遺跡（7） |
| 3 本郷前遺跡（1） | 12 本村南沖遺跡 |
| 4 三輪遺跡（5） | 13 美和公園遺跡 |
| 5 三輪遺跡（6） | 14 長野女子高校校庭遺跡 |
| 6 三輪遺跡（1） | 15 本村東沖遺跡（1） |
| 7 三輪遺跡（2） | 16 返目遺跡 |
| 8 三輪遺跡（8） | 17 桐原宮西遺跡 |
| 9 三輪遺跡（4） | |

※同一遺跡における複数の調査地点に対しては、それぞれの報告書に冠した番号を付してある。

第2図 調査地と周辺遺跡（1/20,000）

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査の概要

今回調査の対象となったのは、開発によって遺跡に影響を受ける建物部分で実質発掘調査面積は150㎡である(第3図)。

発掘調査に先立ち、東西に2か所の試掘坑を設定して試掘調査を行った。西側の試掘坑では、地表下55cmで黒褐色土層が検出された。東側の試掘坑では、地表下65cmで黒褐色土層が検出され、土器片が見つかった。したがってこの黒褐色土層を遺物包含層と判断し、埋蔵文化財の包蔵を確認した。

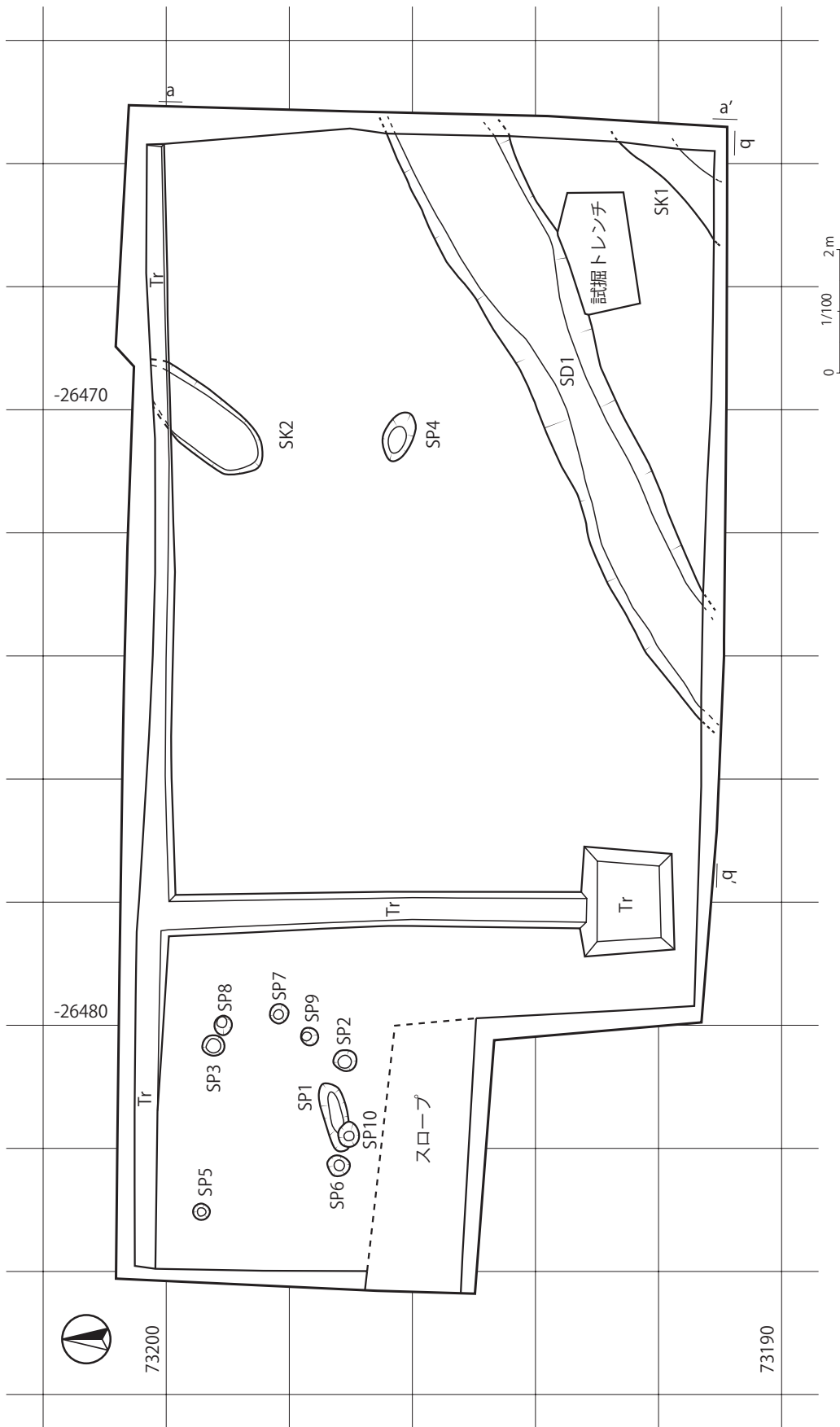
重機による表土掘削は調査区東側から行い、地表下約55~70cmで包含層を確認し、約80~90cmで遺構検出面となった。検出面上面の高さで湧水があり、検出等の作業が行うことができないため、調査区北側に排水用溝を掘り、南西側に集めポンプにより排水しながら調査を行い、溝跡1条、土坑2基、小穴10基を検出した。スロープは、重機掘削により遺構がないことを確認したのち、埋め戻して設定した。

基本層序は調査区東壁で確認し、第1層は表土。第2・3層は褐灰色・灰黄褐色粘土層で水田耕作土。第4~7層は水田以前の堆積だが遺構や遺物は見られなかった。第8層は礫混じり黒色粘質土層で調査区の南東側で遺物がまとまって出土した。遺物包含層であることを確認した。第11層は地山でこの上面が遺構検出面となる。なお、検出面において明確な勾配は認められないが、排水ポンプを設置した南西部分がやや低い。

土器の大半は溝跡の検出および覆土内から出土し、残りは調査区壁の検出時に小片がわずかに出土したのみであった。また土坑や小穴から土器の出土はなかった。

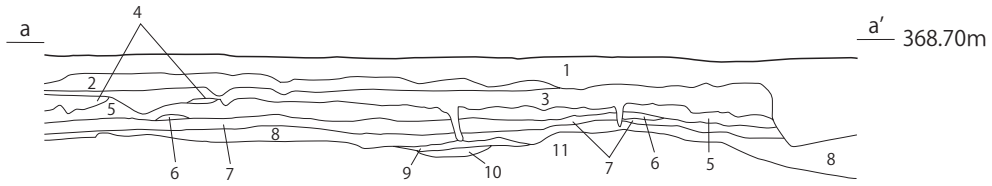


第3図 保護対象範囲及び調査区 (1/1,000)

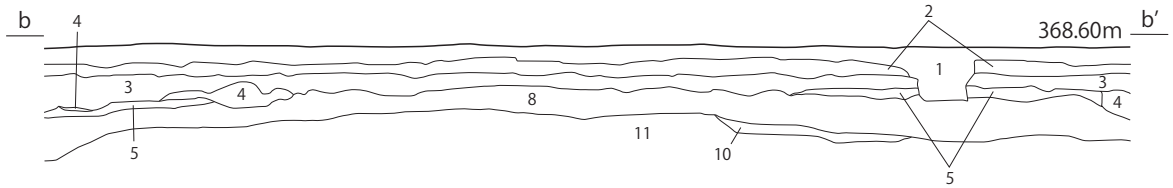


第4図 調査区全体図 (1/100)

調査区 東壁



調査区 南壁



- 1 表土
- 2 褐灰色粘土 しまりあり 粘性ややあり 鉄分沈着あり 水田耕作土
- 3 灰黄褐色粘土 しまりなし 粘性ややあり 水田耕作土
- 4 褐色粗砂 しまりなし 粘性なし
- 5 黒褐色粘質土 しまりなし 粘性あり
- 6 暗褐色粗砂 しまりなし 粘性なし
- 7 黒色粘質土 しまりなし 粘性あり 5cm以下の礫を少し含む
- 8 黒色粘質土 しまりなし 粘性なし 10cm以下の礫を多く含む 遺物包含層
- 9 褐灰色粘土 しまりなし 粘性あり
- 10 にぶい黄褐色粗砂 しまりなし 粘性なし
- 11 褐色粗砂 地山層

0 1/80 2m

第5図 調査区断面図 (1/80)



調査区 東壁



調査区 南壁



調査地周辺 航空写真



調査区全景

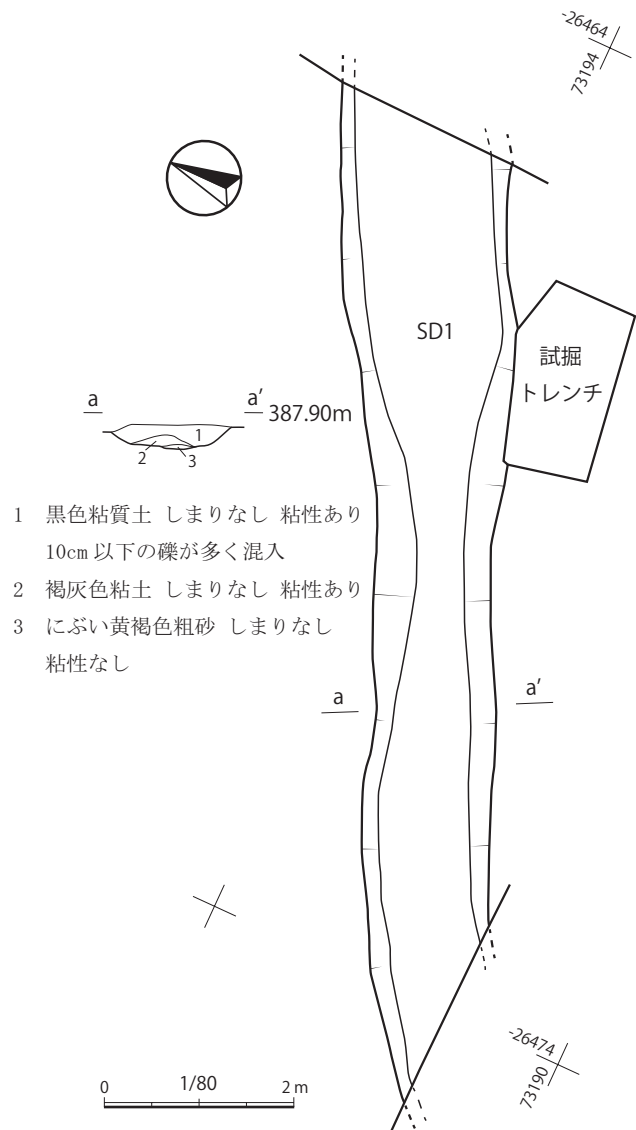
第2節 遺構と遺物

【溝跡】

SD1 調査区南東に位置する。等高線に沿って北東-南西方向に直線的に掘り込まれた溝で、両端は調査区外に延びる。

規模は、確認長10.8m、幅1.2~1.8mで、確認面から深さ25cmを測る。底部はなだらかな平坦面が形成される。北東端と南西端の溝底の高低差はない。

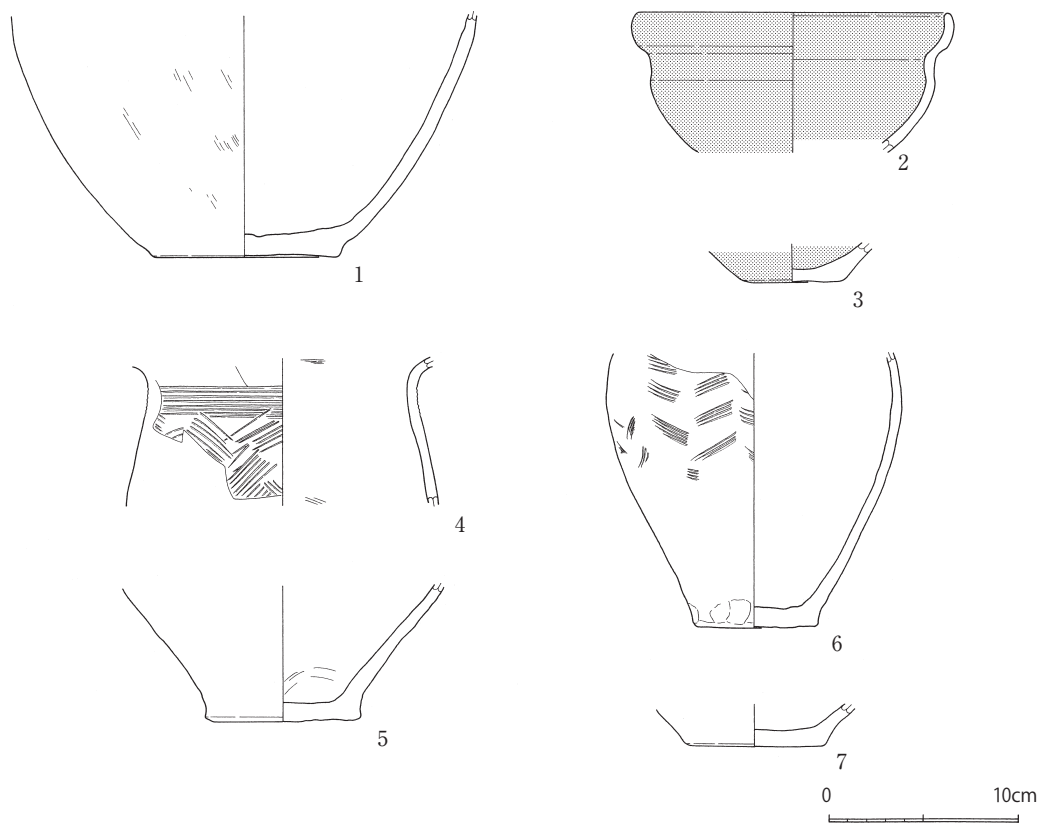
下層からにぶい黄褐色粗砂、褐灰色粘土、礫混じり黒色粘質土の順に堆積し、南西側では褐灰色粘土はなくなる。土器は、上層の礫交じり黒色粘質土から多く出土し、褐灰色粘土からは見つからず、下層のにぶい黄褐色粗砂からはわずかに出土している。主体を占めるのは弥生土器で、総量は4,331gを量る。出土土器は壺（1、8~14）、鉢（2、3）、甕（4~7、15~19）である。1は胴部下半で、外面はハケ調整後にミガキ調整が施される。8は口唇部に刻みを施す。9は口縁部が受け口状になり、縄文地に山形文が巡る。10~13は頸部の破片で文様には平行線文、山形文、縄文が見られる。14は胴部の破片で沈線文が施文される。4は頸部に簾状文、胴部に縦羽状文が施文される。15は口唇部に縄文が施される。16~19は胴部の破片で16・18は波状文を施文したのち縦方向に櫛描文で区画する。17・19は波状文が施文される。2は受口状口縁の鉢で内外面が赤彩される。また同一個体と思われる破片には2個一対の穿孔が見られる。出土土器の様相から弥生時代中期後半の所産と想定される。



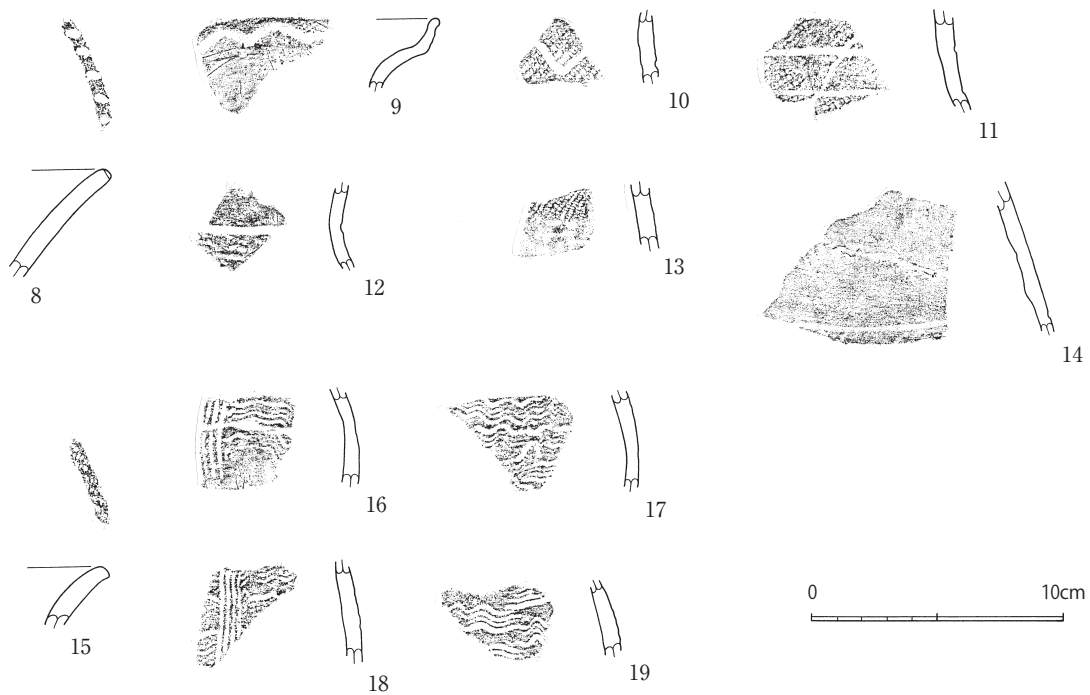
第6図 SD1 遺構実測図 (1/80)



SD1 完掘（東から）



第7图 SD1出土土器实测图 (S=1/4)



第8图 SD1出土土器拓影 (S=1/3)

遺物写真



【土坑】

SK 1 調査区の南東隅に位置する。土坑として調査を行ったがごく一部の検出のため様相は不明である。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

SK 2 北側の一部が調査区外となるが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。規模は長径の確認できる範囲で220cm、短径96cm、深さは9cmを測る。出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

【小穴】

SP 1 平面形は楕円形で長径114cm、短径40cm、深さは14cmを測る。

SP 2～3・5～10 調査区西側でSP 1と一緒に検出した。平面形は円形で径約30～40cm、深さ10～30cm程を測る。

SP 4 調査区東側に位置し、平面形は楕円形で長径84cm、短径47cm、深さ18cmを測る。

※すべてのSPからの出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

表1 遺構一覧表

遺構名	時期	遺構			出土土器	
		平面形	規模 (cm)	備考	総量 (g)	報告数
SD 1	弥生中期		幅120～180 深さ25	北東～南西	4,331	19
SK 1		不明	径(90) 深さ(40)			
SK 2		楕円形	長径(220) 短径96 深さ9			
SP 1		楕円形	長径114 短径40 深さ14	SP10と重複		
SP 2		円形	径38 深さ17			
SP 3		円形	径36 深さ14			
SP 4		楕円形	長径84 短径47 深さ18			
SP 5		円形	径26 深さ10			
SP 6		円形	径35 深さ14			
SP 7		円形	径31 深さ13			
SP 8		円形	径31 深さ30			
SP 9		円形	径29 深さ10			
SP 10		円形	径42 深さ26	SP 1と重複		

その他出土土器 153
総合計 4,484

表2 遺物観察表

図版 図番号	出土遺構		種別	器種	残存			寸法(cm)			成形・調整			施文・その他	時代
	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	底部			
7 1	SD1	覆土上層	弥生	壺	胴～底	1/3		9.9	(12.8)	ハケ→ミガキ	ナデ?	ナデ		弥・中	
7 2	SD1	覆土上層	弥生	鉢	口縁～胴	1/3	16.4		(7.4)	ミガキ	ミガキ		赤彩	弥・中	
7 3	SD1	覆土下層	弥生	鉢	底	1/1		5.5	(2.1)	ミガキ	ミガキ	ナデ?	赤彩	弥・中	
7 4	SD1	覆土上層	弥生	甕	頸	1/2			(7.8)	横ナデ	ハケ→ミガキ		籐状文(7～8)・縦羽状文(7)	弥・中	
7 5	SD1	覆土上層	弥生	甕	胴下～底	1/2		8.3	(7.2)		胴:ハケ?/内底:ナデ	ナデ		弥・中	
7 6	SD1	覆土上層	弥生	甕	胴～底	1/2		6.6	(14.6)	指ナデ	ミガキ/内底:ナデ	ナデ	縦羽状文(5)	弥・中	
8 7	SD1	覆土上層	弥生	甕	底	1/1		7.4	(2.3)		ナデ	ナデ	黒斑	弥・中	
8 8	SD1	覆土下層	弥生	壺	口縁								拓本	弥・中	
8 9	SD1	検出面	弥生	壺	口縁								拓本	弥・中	
8 10	SD1	覆土上層	弥生	壺	頸								拓本	弥・中	
8 11	SD1	覆土上層	弥生	壺	頸								拓本	弥・中	
8 12	SD1	覆土上層	弥生	壺	頸								拓本	弥・中	
8 13	SD1	覆土上層	弥生	壺	頸								拓本	弥・中	
8 14	SD1	覆土上層	弥生	壺	胴								拓本	弥・中	
8 15	SD1	覆土下層	弥生	甕	口縁								拓本	弥・中	
8 16	SD1	覆土上層	弥生	甕	胴								拓本	弥・中	
8 17	SD1	覆土上層	弥生	甕	胴								拓本	弥・中	
8 18	SD1	覆土上層	弥生	甕	胴								拓本	弥・中	
8 19	SD1	覆土上層	弥生	甕	胴								拓本	弥・中	

凡例 弥・中=弥生時代中期

※()内の法量は、残存部分の計測値を示す。

※出土層位は調査中の遺物取り上げ時の起債を採用している。

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、調査面積が約150㎡と限られたなかで、溝跡1条、土坑2基、小穴10基が検出された。

確認された溝跡からは栗林期の土器が出土していることから、弥生時代中期後半に溝として機能していたと考えられる。出土した遺物のほとんどが溝跡内から見つかり、土坑・小穴の中からは出土がない。遺物包含層にもほとんど確認できず、遺構・遺物が希薄になっていることから、調査地は集落の中心から少し離れた場所に位置していると考えられる。

これまでの浅川扇状地における調査では、弥生時代中期の集落が急傾斜扇状地の扇央部と急傾斜扇状地から緩傾斜扇状地に変化する地点にあることがわかっている（長野県埋文2017）。本調査地周辺はこの位置にあたり、急傾斜扇状地の扇端に相当する。またこのような場所では湧水が認められ、実際検出面において湧水を確認している。浅川扇状地遺跡群での弥生時代中期の集落はこのような微高地上ですぐに水を得やすい場所で営まれている。

旭幼稚園遺跡や本郷前遺跡（1）で行われた発掘調査では、弥生時代中期後半の竪穴住居跡及び竪穴状遺構が確認されていて、遺構の分布から小規模集落が形成されていた可能性が高いと想定している。今回見つかった溝跡はこの集落の南端外縁部に位置すると考えられ、調査結果から集落の広がりを検討する際の有用な資料であると評価できよう。

弥生時代後期以降は遺構の検出はなく、今までの調査から鐘鑄川周辺が集落の南端になっていると考えられる。また昭和まで「三輪たんぼ」と呼ばれた水田の名残は調査区断面の2・3層の水田耕作土で確認できたが、遺物等から時期の特定はできなかった。

引用・参考文献

- 上水内郡誌編集会 1976 『上水内郡誌（歴史編）』
- 長野県考古学会弥生部会 1999 『長野県の弥生土器（長野県の弥生土器編年発表要旨／長野県弥生土器集成図録）』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市内その3 松原遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2017 『浅川扇状地遺跡群の弥生時代集落の変遷』『浅川扇状地遺跡群 本村南沖遺跡』
- 長野市教育委員会 1980 『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第6集
- 長野市教育委員会 1987 『三輪遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第20集
- 長野市教育委員会 1991 『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（3）』長野市の埋蔵文化財第38集
- 長野市教育委員会 1993 『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡（4）』長野市の埋蔵文化財第49集
- 長野市教育委員会 1993 『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集
- 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第58集
- 長野市教育委員会 1994 『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡（5）・小島柳原遺跡群 上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第62集
- 長野市教育委員会 1996 『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ谷遺跡・三輪遺跡（6）／棗河原遺跡』長野市の埋蔵文化財第75集
- 長野市教育委員会 1998 『松原遺跡Ⅴ』長野市の埋蔵文化財第92集
- 長野市教育委員会 2004 『篠ノ井南条遺跡・浅川扇状地遺跡群 辰巳池遺跡・本郷前遺跡』長野市の埋蔵文化財第103集
- 長野市教育委員会 2008 『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡（5）』長野市の埋蔵文化財第120集
- 長野市教育委員会 2015 『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡（7）・三輪遺跡（8）』長野市の埋蔵文化財第140集
- 長野市誌編さん委員会 1997 『長野市誌』第八巻 旧市町村史編

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん ほんごうまえいせき2
書名	浅川扇状地遺跡群 本郷前遺跡（2）
副書名	三輪3丁目フォレストウイングマンション新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第150集
編著者名	鈴木時夫 飯島哲也
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2018（平成30）年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
ほんごうまえ 本郷前遺跡	ながの けんながの し 長野県長野市 みわさんちようめ ほん 三輪三丁目826番1	20201	A-061	36° 39' 34"	138° 12' 14"	20161111 ～ 20161124	150㎡	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
本郷前遺跡	集落	弥生時代中期		溝跡1条 土坑2基 小穴10基		弥生土器		

長野市の埋蔵文化財 第150集

浅川扇状地遺跡群

本郷前遺跡（2）

平成30年 3月23日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 文化財課 埋蔵文化財センター
印刷 大日本法令印刷株式会社